

学び、働くならわがまち 教育再生を基盤に地域再生

防府市はまち全体が 歴史ミュージアム

山口県の中央部に位置する防府市の市域は、瀬戸内海に注ぎこむ佐波川流域の防府平野（県内最大の平野）に展開しており、主要部分はJR山陽本線を境にほぼ南北に二分される。

防府市は歴史的に幕藩体制下の長州藩領（長門・周防のいわゆる防長2州）としての印象が強い。しかし、現在の防府市と周辺一帯を指す旧国名・周防国の歴史は、7世紀の律令制時代にまでさかのぼる。そのため山陽本線より北側（内陸側）の市域には、奈良時代を中心とする律令制下の国衙（国府の役所）跡や国分寺（今も偉容を誇っている）などがあり、日本三天満宮の一つで「最古の天神様」としても知られる防府天満宮（平安時代創建）、旧長州藩主・毛利氏邸宅（大正時代建設）を活用した毛利氏庭園・毛利博物館など、古代から近

代にまで至る幅広い時代の重要な史跡群が立地している。

山陽本線より南側の市域は瀬戸内海に向かって開けている。こちら側には日本海側の萩市から防府天満宮をへて、三田尻港に至る萩往還とその周辺に、主に長州藩時代の史跡が数多く残されている。

長州藩を経済的に支えた塩田事業でも知られる三田尻は、長州の歴代藩主が参勤交代の際に使用した船便（大阪行き）の発着港であり、萩往還は陰陽をつなぐ主要街道だった。

松下村塾のある萩を志士たちの揺籃の地とすれば、萩と直結し、主要街道の山陽道を通り、船便まであつて京・大坂により近い防府の地は、幕末維新の主役となった多くの志士たち（長州藩士に限らない）が訪れた活動拠点であり、交流拠点でもあったといえる。

志士たちの拠点といえども一つ、防府市の東端に近い富海地区の歴史が興味深い。江戸時代の富海地区は徳山藩領（長州藩支藩）の

まつうらまさと
松浦正人
防府市長



漁村で小規模の宿場機能も持っていた。

た。富海ではさらに

「飛船」と呼ばれる大型帆の高速

小型船を駆使した海運業が当時盛んで、航路は瀬戸内沿岸各地、京・大坂・九州方面とも結ばれていた。まさに高速物流基地の様相をも呈していたのだ。

この勇壮な響きの飛船は、吉田松陰や高杉晋作、坂本竜馬など維新の志士たちが、京・大坂・九州方面へと出かける際に自在に利用



防府天満宮は数ある歴史ランドマークの一つ



天満宮参道の入口にある「うめてらす」は観光情報基地



防府天満宮で毎年11月に開催される御神幸祭(裸坊祭)は西日本屈指の荒祭

駅前のドラマ館から防府天満宮

が実施される予定だ。

その他、大河ドラマが始まればかなりの増加が見込まれる観光客受け入れ態勢の整備事業、

した高速交通手段としても知られ、飛船間屋は時に志士たちの隠れ家になったといわれる。

このようにまち全体が歴史ミュージアムのような防府市では今、市街地のそこかしこに「花燃ゆ」「志士闊歩のまち」などの文字が書かれたノボリが風にひるがえり、道行く人々の目を引いている。平成27年放映予定のNHK大河ドラマ『花燃ゆ』の主要舞台が防府市であることから、おもてなし観光課（今年4月、

観光振興課から改組）を中心に、目下、官民連携・市民協働による大々的な誘客キャンペーンが行われている。

大河ドラマを契機とする全国発信

『花燃ゆ』の主人公である、楢取素彦・文（後に美和子と改名）夫妻の終焉の地が実は防府なのです。楢取素彦さんは吉田松陰先生の次妹・寿さん、四妹・文さんの二人を妻とした元長州藩士で、幕末期の長州藩の殖産興業に力を尽くしました。明治維新後はその経験を生かし、熊谷県令や群馬県令などを歴任して、各地でやはり殖産興業に大変な功績のあった方です」

そう語るのは松浦正人防府市長だ。

一方の文は、吉田松陰亡き後に長州藩の舵取り役となった久坂玄瑞と結婚するも、久坂玄瑞が禁門の変で戦死したため、周囲の勧めで、楢取素彦と再婚することになる。楢取素彦はその後、元老院議員、裁判官、貴族院議員、宮中顧問官などを歴任して男爵にも叙せられ、晩年の約30年は文夫人と防府市で過ごした。

おもてなし観光課では現在、楢取素彦・文夫妻の事績を簡潔にまとめた冊子やDVDを無料配布するなど、大河ドラマにまつわる予備知識の市民への周知徹底を図っている。同時に『花燃ゆ』の話題や「ゆかりの地」の紹介をメインに据え、防府市がもつ数々の地域資源の発信を旨とする誘客キャンペーンを多彩に展開している。

大河ドラマがらみの観光プロモーションの核は、平成27年1月11日にオープンする「花燃ゆ大河ドラマ館」（防府駅前再開発ビル・ルルサス防府2階に設置）だ。館内にはドラマ関係の各種展示のほか、防府市の地域資源を多角的に発信するための展示などが実施される予定だ。

に至るルート間における各種イベント実施などのほか、大河ドラマと一緒に取り上げられる萩市・前橋市との3市交流事業および共同ツアー企画の実施、関連商品の開発・販売、大河ドラマのロケ支援、さらには観光タクシーや定期観光バス等の2次交通の充実化などの準備が、着々となされつつある。市内を歩いていると、そうした熱気がそこかしこにみなぎり、商店街や観光ポイントになりそうな施設などの活気からは大河ドラマに寄せる期待の大きさが如実に感じ取れる。

「しかし、大河ドラマに過剰な期待をかけるのは禁物です」と松浦市長はいう。「大河ドラマを契機に防府市を全国発信するのは一つのチャンスですし、それなりの効果もあるで



平成27年1月11日オープン予定の「ほうふ花燃ゆ大河ドラマ館」のイメージパース

しょう。しかし、勘違いしてはいけないのは、そうした効果は一過性で終わりがちだということ。大切なのはそれを恒常的な観光振興、ひいては経済活性化にいかにつなげるかということです。しかし、それ以上に大切なのは、これを契機に防府がどのような歴史を刻んできたまちであるかを官民が改めて認識し、学び合いながら、まちの将来について地に足の着いたイメージをしっかりと共有することだと思ふのです」

ここでいう「まちの将来」とは、経済的な意味での地域振興策や活性化施策などを果たすことだけを指すのではない。それらを包含しつつ、「まちの将来」の基盤づくりとして松浦市長がより重要視するのは、地に足の着いた



「花燃ゆ」の主役、楳取素彦・文(美和子)夫妻の菩提寺・大楽寺山門

今年10月28日、政府の教育再生実行会議は安倍晋三首相、下村文部科学大臣の出席のもと、首相官邸で会合を開き、各分科会の議論状況についての討議などが行われた。ご承知のように、現時点で80市以上が参画する教育再生首长会議の会長でもある松浦市長は、「生涯現役・全員参加型社会の実現や地方創生のための教育の在り方」について検討している政府の教育再生実行会議第2分科会の委員として、行政の首長ならではの「教育再生」地

地域づくりとしての教育再生

地域づくりであり、その根幹をなす教育の再生である。



新鮮な海の幸が安いと評判の「潮彩市場防府」



地域で子どもたちを育む教育再生には市民ボランティアの力が不可欠（放課後子ども教室の模様）

たいと考えています。教育再生実行会議における私の「コミュニティ・スクールからスクール・コミュニティへ」という提言はそれが出発点です（松浦市長）

この「コミュニティ・スクールからスクール・コミュニティへ」というスローガンのモデルケースとなっているのは、富海地区

域再生」を旨とする提言を10月21日の分科会で行った。キーワードは「コミュニティ・スクールからスクール・コミュニティへ」（松浦市長）だった。

防府市では平成22年度から「学問のまち防府創生」「教育のまち日本一」をスローガンに、数々の教育改革を実践してきた。学力向上推進室の設置とさまざまな事業（土曜授業推進、小中一貫教育の実施、外国語活動、地域全体による学校図書館活用促進、コミュニティ・スクールの推進など）の遂行によって「教師の授業力」「子どもたちの学力」のさらなる向上を図っている。「学問のまち防府創生」はこうした地域ぐるみの学習環境づくりを旨とする

スローガンだ。また「教育のまち日本一」のスローガンが目指すのは、学力テストの成績を日本一にするというようなことではない。

「教育のまち日本一」を目指すというのは、地域の子どもたちが過ごす義務教育期間の9年間を、子どもたちだけの問題にせず、子どもたちを地域全体で見守り、みんなで育む期間にしよう、その気概は他のどのまちにも負けないといえるぐらいの熱意で取り組もう、ということなのです。もっといえば、防府市では平成24年度から全小中学校でコミュニティ・スクールを実施しておりますが、それをさらに推し進めて、やがては地域そのものを、学校を核にしたコミュニティにしていきたい



赤穂と並び称せられた塩田地帯・三田尻の塩づくりを今に伝える体験施設「三田尻塩田記念産業公園」

での小中一貫教育の実施事業だ。

コミュニティ・スクールはもともと核家族化や少子高齢化などの流れのなかで、徐々に表面化していった学校崩壊や地域崩壊への反省から生まれてきた方法論といえる。小学校区や中学校区を中心に形成されていたコミュニティの崩壊は、すなわち学校崩壊と表裏一体であり、その要因が核家族化や少子化であることはいうまでもない。コミュニティ・スクールは地域の大人たちが地域の学校教育に積極的に参加することで、学校という意味で閉ざされていた場に、狭い意味での学校教育の場だけでない、地域の社会教育の場としての意味も付与されるところに最大の意義



江戸時代後期に建てられた萩往還の道標

がある。子どもたちは大人たちのもつ先人の知恵や地域を護ろうとする熱意からさまざまなインスパイアを受ける。大人たちも地域の学校教育の場に参加することで、自らも生涯学ぶ意欲を醸成し、コミュニティを次世代に託すための取り組みの担い手として重要な役割を果たせる。

子どもが生まれ育って、地域の学校に入り、大人になったらまた地域で結婚し、子育てをするという循環が生まれる。その繰り返しを継続こそが、コミュニティの永続性の元になる。

前述の飛船で名高い富海地区は近年、防府市の中でも急速に過疎化の進んだ地区だ。地区の人口最盛期だった昭和29年に595人いた小学生は現在65人。中学生は259人から22人に激減した。単独の小中学校の存続には非常に厳しい環境の中、富海小学校・富海中学校は平成22年10月に防府市小中一貫教育モデル対象校となり、平成24年度からは、地域



防府で誕生した漂泊の俳人・山頭火をしのぶ「山頭火の小径」(山頭火生家に至る)

で子どもたちを守り育てるコミュニティ・スクール事業を開始した。

以来、他のコミュニティ・スクールと同様、学校運営協議会の積極的な経営参画のもと、小学校からの各種外国語活動・英語教育の実施など、授業全体に小中学校の指導体制のスムーズな継続性を持たせ、小中教員の相互乗り入れ授業、ボランティア活動による地域への貢献、集団の力を生かしながら個別にもきめ細やかな授業の実施など、独自の学校運営を行っている。

「その結果、夢と志、ふるさとへの誇りと愛着を持ちながら、グローバルな視野をも醸成され、社会に自ら参画していくような心豊かな子どもたちをばぐんでいく。この事業の継続した実施によって、地域の循環力を再



防府市クリーンセンターはPFI方式による日本初のごみ焼却・バイオガス化複合施設

生していきたい。つまりスクールが核となってコミュニティの本来もつべき地域力がよみがえる、それが私のいうスクール・コミュニティの意味なのです(松浦市長)

地域力の循環に不可欠な「雇用の場の確保」をはじめ、実現のためにはさまざまなハードがあるものの、防府市がトライしつつある「コミュニティ・スクールからスクール・コミュニティへ」の取り組みは興味深い。折しも今年の11月、明治5年開校の富海小学校は創立140周年の節目を迎える。前述のように、開校のほんのちよつと前まで飛船が往来していた富海地区は、明治維新を実現した志士たちの重要な行動拠点になっていた。その土壌の上に重ねられてきた同地区および富海小学校の歴史を考えると、教育再生Ⅱ地域再



西日本最大規模の「愛情防府フリーマーケット」(地域に立地する企業の積極参加は地元への愛着の証)

生の試みがこの地で行われている意義は、非常に深いといえるのではないだろうか。

「幸せます」と3世代市有住宅構想

取材2日目は防府市恒例、年に1度の「愛情防府フリーマーケット」開催日(10月第3土曜日)だった。官・民・事業者が一体になって盛り上げる愛情防府フリマには、近隣はもとより遠方からも毎年10万人以上(多い時は12万人)の観客が詰めかけることで知られ、250以上の出店者数とともに西日本随一の規模とされる。

午前9時半、松浦市長の開会のあいさつとともに始まった愛情防府フリマは、JR防府駅前から、来年1月にオープンする「花燃ゆ

大河ドラマ館」の入る再開発ビル・ルルサス防府周辺を通り、萩往還の一部でもある防府天満宮の門前町(銀座商店街・天神商店街)をへて、防府天満宮に至る全長2kmほど(横丁や路地も入れて)の広範囲な会場で開催された。この会場で目立つのが、マツダをはじめとする防府市に立地する企業群の社員さんたち。それぞれおそろいの法被を着こなし、市職員や商工関係者、市民ボランティアなどとともに声の限りに客引きを行う。その姿からは自社の立地する防府への、仕事を超えた愛着がひしひしと感じられた。

来年のフリマ開催時期は、大河ドラマ『花燃ゆ』がクライマックスに差し掛かる時期にあたる。恐らく空前の観客動員となることも予測されるが、そのころには防府市観光振興のキャッチフレーズ「幸せます」もきつと、全国区の認知度を獲得しているに違いない。

「幸せます」とは山口県の方言で「幸いです。助かります。うれしく思います」などを意味する言葉。授業で地域活性化に取り組んでいる県立防府商工高校の生徒たちから防府商工会議所に提案されたもので、今や「幸せが増す」という意味合いをもつキャッチフレーズとして標準文字商標にも登録されている。

またそのころには、松浦市長が教育再生実行会議で行ったプレゼンに含まれていた「3世代同居の市有住宅構想」もより具体化しているかもしれない。祖父母・子ども夫婦・孫の3世代の同居が可能な賃貸モデル住宅構想



防府の花の妖精の防府市観光マスコットキャラクター「ぶっちー」

で、3世代入居すれば家賃補助が得られるという試みだが、その実験舞台もまた過疎化が進む富海地区が想定されている。松浦市長が提唱する「教育再生」地域再生」の住宅面からの具体的な事業構想であり、実現すれば介護問題および地域での子育てを推進する上で、核となる構想に発展するのではなからうか。

「もし構想が実現しても入居者があまりい

なかったら、私が息子夫婦や孫たちと入居しようと思っています」と松浦市長は笑う。

だが市長就任以来、不転の決意で進めてきた行財政改革と同様、「教育再生」地域再生」等すべての構想に具体的裏付けを用意しながら臨んできた松浦市長の、まさに真骨頂というべき覚悟の言葉との印象を受けた。

(取材・文 遠藤 隆／取材日平成26年10月17日)